

蔡英文と馬英九の兩岸政策比較

—台湾人の理性的な選択

吳釗燮

一、主権に対する立場の根本的な差異

馬英九は従来から台湾が主権を有しているとは認識しておらず、「中国」の一部分にすぎないと考えた。蔡英文は台湾がすでに一つの主権国家だと考えており、これが両者の最も根本的な違いである。馬英九は台湾を中国の一部分と考えているために、「一つの中国」の原則も問題ではなく、「九二合意」や「胡六点」を兩岸関係推進のルールとして受け入れることや、国際社会において中国が台湾の代弁をすることにも全く異議を唱えていない。国際社会で中国が台湾を代弁するような表現ややり方に対し、馬英九はこれまで全く反駁したこともなく、軍事安全保障上の議題に対し、口頭で宣伝したに過ぎない。また、馬英九は選挙の期間に限って「台湾の前途は台湾人が決める」と嘯き、票を掠め取ったのだ。

反対に、蔡英文の主権に対する立場は台湾前途決議文を出発点としており、台湾の主権に軸足を置いている。台湾の主権に立脚しながら中国との交流や国際社会への活動に参加しようというものだ。これまで蔡英文が台湾を代表して中国と行ってきた貿易協定の経験からみると、台湾の主権上の地位を譲歩することは許さないだろう。

二、中国を如何に見ているか

中国は台湾の隣人であり、文化や血縁の上で密接な関係を有している。貿易上の交流があると同時に、台湾の国家安全保障を脅かす最大の要

因ともなっている。それが故に、中国との交流が必要不可欠となっているのだ。しかし、馬英九の態度は中国が最も重要な、極端に言えば唯一の選択肢のように捉えており、馬英九政権下において台湾は教育、文化、経済、治安、果ては原発に至るまであらゆる物事が、必ず中国とリンクされており、どのような問題が出来ても、その解決方法はただ一つ「中国」なのである。事実上、馬英九の対中交流に対する考え方はまさに「胡六点」の中で述べられている内容である。つまり、馬政府が台湾の主権の立場を中国の一部分とするのみならず、政策や交流の面においても台湾のアイデンティティを喪失させるものである。

蔡英文の中国との交流に対する原則は、中国を世界における一つの国家と見なすに過ぎない。また、国際社会と共同で努力し、対中政策をともに遂行し、あらゆる物事について中国のことだけを考慮するようなやり方に陥らないことを希望している。民主台湾の独立性こそ、台湾が国際社会に立脚する基礎であり、台湾が国外で交流を進める際には、中国が唯一の相手ではない。中国との交流を進める際には、台湾への影響を斟酌するべきであり、バランスのとれた、中国からの影響を中和するような方法を選択すべきである。

三、政府管理面の差異

政府とは一体的なものであり、いかなる政府機関も兩岸政策に関する行為や発言をする際、必ず

関連機関によるチェックや大陸委員会もしくは国家安全会議による政策統合を経ることによって初めて実行されるものだ。同時に、これが大陸委員会や国家安全会議が設立された最も重要な目的なのである。そして、政策が決められた後、それを実行する部門を追跡・管理することにより、国家全体の利益を得ることが出来るのだ。政府首長の政策決定と発言は必ず穏健かつ漸進的なものでなくてはならない。しかしこの点、馬英九の個人的な好き嫌いが政府機関のチェックや政策決定を凌駕してしまっており、それによって幕僚機関や統合機関が元々有している機能を喪失させる結果となっている。同時に、各部署が主導的に「全ては馬總統のお気の召すままに」を前提とする状態になり下がっており、金融管理委員会が中国との協議を進めていることを大陸委員会が知らされていないという状況さえ生み出すこととなった。このほか、政策決定後、馬英九は政策の遂行やその成果については関心を示すことがない。例えば、馬政府は鳴り物入りで実現した観光政策だが、政策実施以降は大きな問題が次々と出来ている。それ以外にも、プレイスメント・マーケティングの問題についても、馬政府は全くその責任を負おうとしていない。

蔡英文はかつて国家安全会議と大陸委員会の要職にあつたため、政策チェックや統合過程の歴史的記録を目の当たりにすることが出来た。各部署の歩調が不一致といった状況や、関連する政策のフォローや管理の欠乏といった問題は、蔡英文の場合には起こり得ないだろう。重要な業務に対しては厳粛かつ緊張して臨むというのが、蔡英文政府の風格である。

四、国内の異なる意見の統合

社会の各層は兩岸政策に対し、当然ながら鮮明な立場を表明するであろう。このため、兩岸政策を制定する際の討論と統合の過程は不可欠であり、それを経て初めて台湾は一步を踏み出せることになる。台湾は中国の脅威に直面しており、台湾の分裂は国家にとって決定的に不利である。国内の意見がまとまらない場合、馬英九の対応は明確である。中国に対しては卑屈になるにもかかわらず、国内の異なる意見に対しては、あたかも敵と味方のように区別し、異なる考え方の人々の意見の中に盲点が存在するかもしれないといったことなど考えたこともない。こうしたやり方は国家の進歩に対し全く利益にならず、むしろ台湾の分裂を加速させるものに過ぎない。

蔡英文は2000年に部署横断グループの成立に関与し、2001年には国家経済発展会議、2006年には経済永続発展会議を主宰した。これらの会議の目標は、国内の異なる意見を統合し、兩岸政策を団結国家の政策とするものであった。蔡英文は大陸委員会の主任委員だった際、兩岸条例の改正作業に着手。立法院の与野党団との意思疎通を行ったことが功を奏し、異なる意見の対立を解消することに成功した。このほか、蔡英文は国家安全会議に参加した経験から、安全保障に関するテーマに関しても、かなり独自の見方を持っている。彼女の主張は、安全保障とは一つの伝承し続けていかなければならない專業であり、馬英九政府が前任の陳水扁政権との関連を一切断ち切ったやり方とは対極に位置するものである。 **B**